



碑前祭で流麗な歌声を響かせる盛岡二高音楽部

歌人大西民子をしのぶ

盛岡市出身の歌人、大西民子（1924～94）を顕彰する、もろおか民子の会（阿部正樹会長）は14日、盛岡市本町通の上の橋緑地で、第14回「きさらしか歌碑」碑前祭を開いた。新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、3年ぶりの開催。約60人が短歌「きさらか」といばむ鳥の去りしあと長くかかちて水はしづまる」が刻まれた歌碑前に集い、献花や短歌鑑賞発表、合唱などを行った。

大西民子は、同市八曲家の平井丈一朗さん趣旨に一番かなう。ど幡町生まれ。県立盛岡が同歌に曲を付けた際、うぞゆつくり過し高等女学校（現盛岡二）の譜面が刻まれていて、民子さんに花をあげてほしい」とあいさ高）、奈良女子高等師範学校を卒業後、釜石高等女学校（現釜石高）で教壇に立った。石川啄木に憧れて短歌を作り始め、「まほろしの椅子」など歌集9冊を刊行。遼空賞、詩歌文学館賞、紫綬褒章などの功績を残した。

歌碑は2009年5月8日、大西民子の誕生日に建てられた。直筆の「きさらか」の歌と、チェロ奏者で作られた「花びらが時間をかけ

上の橋緑地で碑前祭 盛岡二高生が歌などささげる

てゆつくりと閉じるように、少女も雨がやみ、お気に入りの傘を閉じるのが惜しかったのだと思つ。たまたまる傘を花びらに例えることで、少女の幼さやかわいらしさが感じ取れる。また、傘の色を限定することによって、少女にとつての傘への特別感が表現されていて、読み手が情景を浮かべやすい歌だと思つた」と作品に対する自分の見解を語った。

同校音楽部は、民子に通っていた県立盛岡高等女学校時代の校歌や盛岡二高の校歌、歌碑に刻まれた「きさらかに」などの曲を歌い、流麗なハーモニーを響かせた。

碑前祭では、波瀾短歌会の真鍋正勇さんと、民子の教え子の松村愛子さんが亡くなったことに哀悼の意を表し、黙とうも行われた。

（盛岡タイムス）